



弱小卓球部 変革への道

ドゥドゥドゥ



床が鳴る音まで「試合の一部」みたいに響いていた。



キユッ

うちの卓球部は弱い。
勝つための自信なんて、
ずっと薄いままだった。



ズオン

全国の基準で。

ここから基礎を
やり直す。

配属されたのは、
全国大会入賞クラスの
部員と顧問だった。



握り。

構え。

打ち。

マナブ。足、止まってるよ



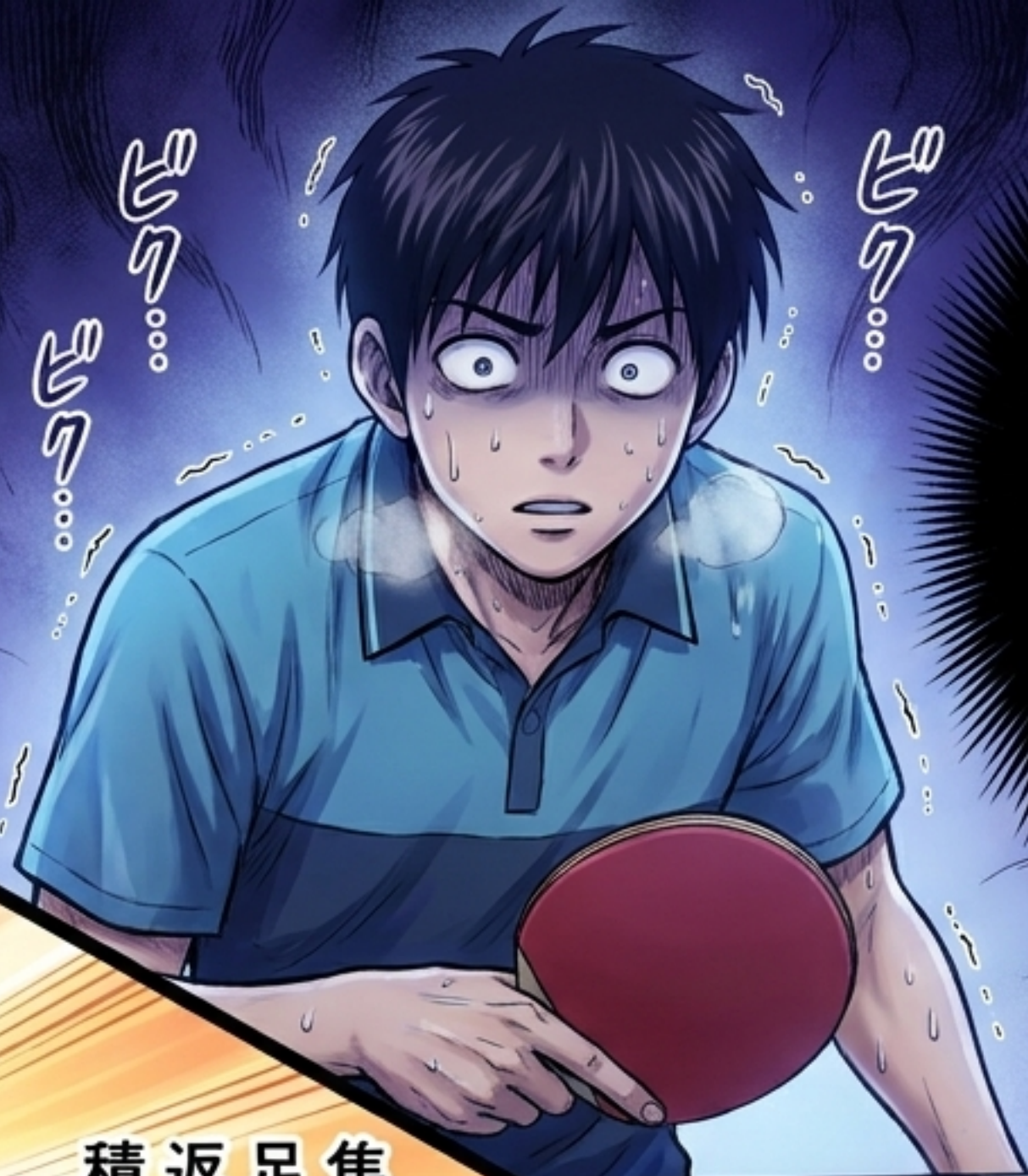
速くするな。
順番を順番を戻せ。
ガーン
間を作るんだ



「焦り」

(緊張で体が
固まる.....)

ドク...
ドク...
ドク...



(間を作れ)

焦って打たず、
足を先に動かす。
返す場所が定まり、
積み上がっていく。



決勝戦：2対2



気づけば
決勝まで
来ていた。



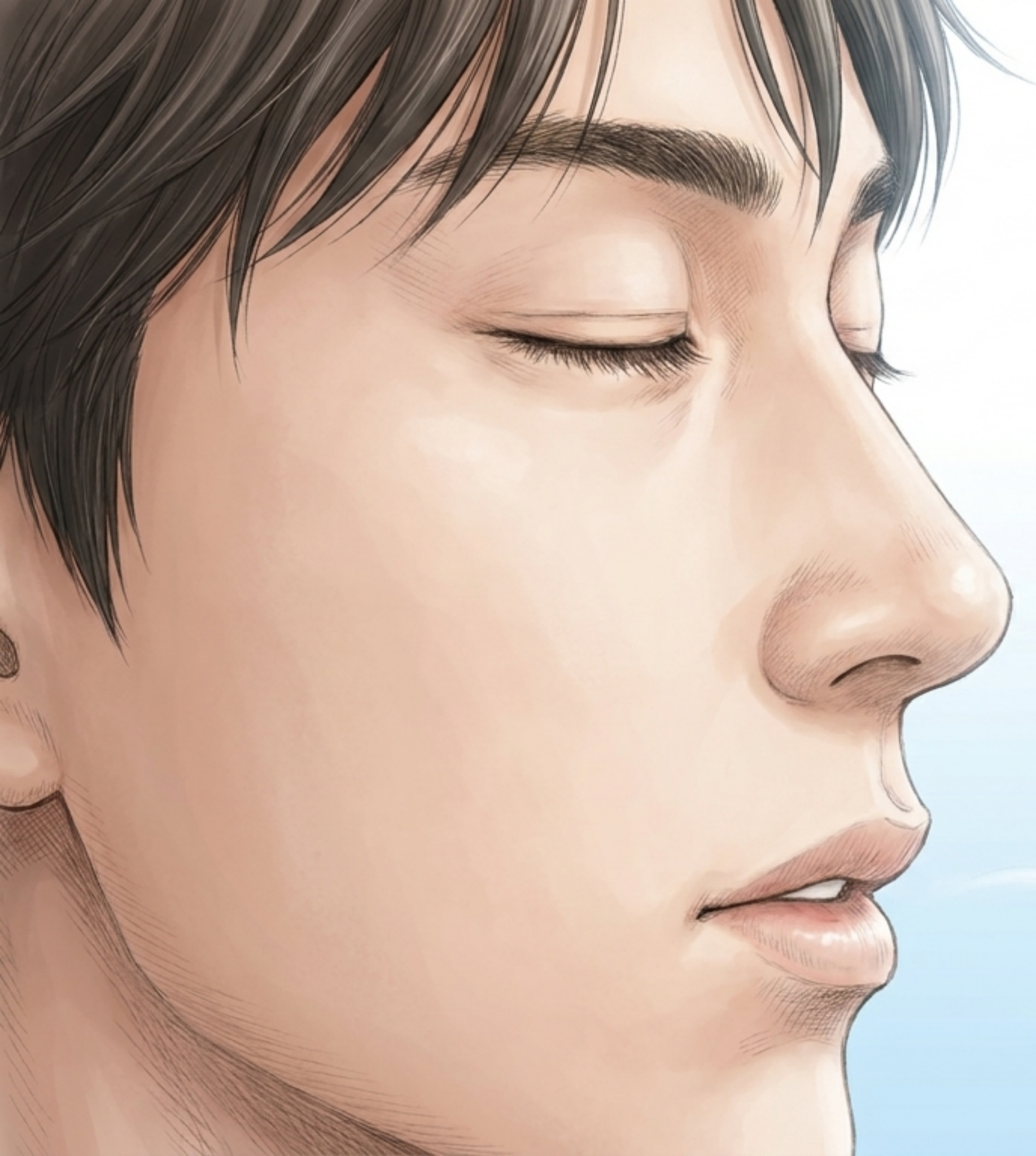
第5ゲーム





(速すぎる……!)

(このまま……)
胸がざわついて
足が止まる。



「順番を戻せ」



視線を回転の“兆し”へ合わせ、踏み込みのタイミングをずらす。追いかけるのではなく、間に入る。



次のスマッシュ。
マナブはカウンターで返した。
引き付けて、受ける場所を変えた
返しが点になる。



中井の表情が初めて揺れた。
焦りじゃない。

「分かった」というような理解の揺れ。
マナブの位置とタイミングを、
今やっと読まれ始めたのだ。



勝負!



ボールがコート奥へ沈み、
返球が成立した瞬間、
会場の空気が一拍遅れて動く。
マナブの勝利。優勝。

基礎を信じた。
お前たちの勝ちだ

練習を変えたから勝てた。
基礎から作り直して、
最後に反射が最後に
モタル〃勝てる形〃になった。
まだ始まったばかりだ。
全国へ行くために。